



発行日：平成 31 年 2 月  
編集・発行：矢作川流域圏懇談会 事務局

### ◆第 10 回海部会まとめの会を開催しました！

1 月 31 日（木）に第 10 回海部会まとめの会を開催しました。  
今回も吉田漁業組合の石川組合長から、秋から冬にかけて計測された三河湾の水質データからみえる栄養塩とプランクトンの状況について話題提供をいただいたほか、9 年間の振り返りについて意見交換を行いました。



日 時：H31 年 1 月 31 日（木） 14:00～16:30  
場 所：西尾市役所会議棟 第 4 会議室  
参加人数：19 名（事務局を含む）

### ◆主な活動内容

#### 1 今秋～冬にかけての三河湾の水質状況と水産資源への影響



○今年は10月の初めに台風の影響による出水があり、そのあと、pHが9前後という値が続き、プランクトン量が異常に多かった。それから11月になると一気に様子が変わり、11月1日時点でプランクトンは検出なしという観測地点が増え、今日現在に至るまでプランクトンが0状態で続いている。反対に栄養塩が増加傾向になった。このあたり、浄化センターの放流分が影響しているのではないかと思う。



昨年度の放流稚貝の殻張組成の分析結果をみると、7月に放流したものは11月まで順調に成長していたが12月になると1/10まで一気に減耗している。10月放流稚貝については、一朝早く減耗が始まっている。秋の産卵後でアサリが疲弊しているときに、餌となるプランクトンの少ない時期が重なって一気に減耗したのではないかという話である。



吉田海岸で行ったフルボ酸の実証実験の結果についてみると、11月下旬以降、一様に減少しており、対照区との結果を比較しても大きな差はない。吉田海岸のような広い漁場で10m程度の試験区がどの程度影響をあたえるのか、実験区としての妥当性がなかったように思える。（石川甚）

○有明海でフルボ酸鉄を利用した同じような実験をやっているが、私は意味がないと思う。この海的环境条件をみるかぎり、同じように減耗するという結果になる。それは大海域の水の質に支配されているからである。ここ30年の海の栄養塩の傾向は右肩下がりであり、現在は最低水準である。ある。この肥満度のレベルを引き上げる対策をしないかぎり、何をやっても無駄である。



矢作川浄化センター管理運転による栄養塩の放流量を試算してみたところ、浄化センターの負荷量は場合によっては矢作川本川に匹敵するくらいのオーダーである。ただし、今の管理運転のレベルでは吉田の漁場まで効果が及ばない。

○リンが十分にあった時の海苔の品質はものすごく良くなる。浄化センターの放流口近くの栄養塩が少ない。これは海流で回っている感じがする。海苔を見ていると、よくわかる。風向き、潮の流れで時々環境が異なるが、効果があったのは矢作古川の西側までである。（石川甚）



○アサリにとって、いい餌はケイ藻というのはわかっている。チッツ、リンがまわる時間軸とケイ酸がまわる時間軸が異なる。ケイ酸は雨水が森林の土壌を通った水に多く含まれる。なので、間伐など山の手入れをやる必要がある。これが理想である。（井上）

○努力をしても、海は悪くなる一方である。三河湾という地形が潮の流れを変えている。簡単には変わらないと思う。山の水を海に流してほしいというのが希望である。三河湾を一気に変えることはできないと思う。

○昨日、西尾市の環境審議会があったが、産廃の話題となったが、そのうち海で漁業ができないなら、産廃業者に海を売るような話なるのではという危機感があった。今できることは何でもやったほうがいい。(高橋)

○設楽ダムを造らないという話もつながる。(井上)

○今のアサリの話の焦点をどこに絞り込むかということになれば、ある程度の確率でリンが少ないというのは間違いない。今はその1点に集中して、県や国にその点をお願いするしかなく、中長期的な話はそのあとで自然と出てくると思う。(鈴木)



## 2. 話題提供：三河湾で不漁となったアサリの餌となるケイ藻のいま | 井上祥一郎さんからの話題提供



○9年間の活動として、どの方向をみているかよくわからなくなった時もあったが、色々な問題を共通認識してきたことは良かったと思う。ただ、具体的に何をやったかという話になると、海部会ではなかなか難しかったと思う。(青木)

○川は本川だけでなく、家の中を流れる水も川だという認識で話をする必要がある。海に出していい水と出してはいけない水を一緒になってしまうので、このような状況になっている。この9年間で何が起きたかを整理するとよくわかると思う。(高橋)

○川と下水というのは仲が悪い。川から見れば下水に必要な水を川からとってってしまう。愛知県は流域下水道が完備されてきたところがあり、それをなくすことはできない。海の博物館の館長が「豊かだった伊勢湾」という定義をしている。川であれ、海であれ、きれいな水質がいいことされてきて、それを目指してきた。川の方からは問題提起があったが、海の方からも栄養塩の問題提起の話があったときに、流域下水道はなくせないが、その管理運転の仕方について問題提起することはできるのではないかと。(近藤)

○懇談会を9年間やってきたが、当初は酸欠が問題であって、その原因は浅場や干潟、藻場などを無くして、浄化作用が無くなって赤潮が顕在化し、さらに貧酸素水塊が発生するようになった。だからダムの砂をもってきたりして、干潟、浅場造成を進めようという話を進めてきた。当時はアサリが2万トン弱とれていたが、年々減少しており、平成25年頃を境に激減した。なぜ、アサリが死んだのか、干潟を造成したがアサリがいなければどうにもならないということになってきた。この話は、瀬戸内が7~8年前からきれいな海から豊かな海へということで、海の見え方がかわってきた。伊勢・三河湾でも県知事、環境省へ陳情して栄養不足解消のための管理運転の話になっている。この流域圏の中で栄養負荷や管理運転が問題となっていたわけではない。

○10年、20年とかかわってきたが、この10年が三河湾にとって一番大事な期間であった。9年前からごみや干潟の話があったが、それ以上に重要なことは魚がとれなくなり、アサリがとれなくなったことである。ごみの問題を解決しても、漁業者がいなくなってしまう。この10年を振り返ることが大切である。

○豊かな海は前から話してきた内容であったが、真剣に考えなければならぬ状況となっている。海部会から声を上げる必要があると思う。年表を作るのはいいアイデアだと思う。



## 今後の流域圏懇談会の予定

■平成 30 年度 全体会議 (日時)平成 31 年 3 月 15 日 (金) 14:30~16:30  
場所:愛知県西三河総合庁舎 10階 大会議室

### ◆お問合せ◆

#### 矢作川流域圏懇談会事務局

〒441-8149 愛知県豊橋市中野町字平西 1-6 国土交通省豊橋河川事務所 事業対策官 神本、調査係長 服部  
TEL 0532(48)8107/FAX 0532(48)8100 指導員 宇野

\*矢作川に関する情報は、矢作川流域圏懇談会メーリングリスト (yahagigawa@ijnet.or.jp) までお送りください。

